

# 第18回「たばこはやめて！」(2005～06年)コンクールの審査講評

## 1. ポスターの部

昨今は、学校、役所、駅のホーム、乗物、会議、銀行など、禁煙・無煙になる所が一段と増え、社会的改善が進んでいますが、今回は実施しなかったポスターコンクールには、2,644点の多くの作品が寄せられました。審査は、高校生～一般、中学生、小学生低学年・高学年、幼児に分けて行い、「たばこはやめて！、吸っちゃダメ！...子どもの願い、みんなの願い」をテーマにした、美術コンクールとは少し違った観点から、審査員10人で投票方式+協議で三次～最終審査まで行いました。

ポスターには、言葉によるコミュニケーションとは異なる特色があります。ポスターは、伝えたいことを絵や色・文字などによって、自由な発想で、美しく印象に残るような表現をし、効果的に発信します。家族や身近な人へのメッセージを、作者が自分の感覚や心情と共鳴させながら技法などをよく工夫し、楽しく、ほほえましく、作者の心からのメッセージが私たちの心に響いてくるような作品が多くありました。

発想の転換や気の利いたアイデアで表現された作品は私たちを楽しくさせてくれましたが、自分の力で表現されていて、分かりやすく、印象強くメッセージを表現している作品や、優しさのある目や顔の表情が豊かな作品の評価が高く、最優秀(大臣賞)や優秀賞に選ばれ、××や><などの表現作品の評価は低くなったのは残念でした。表情の豊かさをぜひ工夫していただきたいと思います。

これら入賞した作品が、次回の啓発カレンダーなどのデザインに活用され、多くの人の目に触れ、社会的改善に役立てられることを楽しみにしています。(新谷隆夫、瓜生隆子)

## 2. マークの部

マークは、形・色彩ともに単純明快であることが基本となります。すなわち、<ひと目で意味が分かる>ものでなければなりません。シンプルなものが望まれるのです。

アピールする文言(コピー)の添えていないものが望ましいのですが、たとえ文言を入れるにせよ、せいぜいマークの補助的な扱いにして、言葉そのものをデザイン化したのがマークの理想だと言えましょう。

504点の応募作品の多くが、図柄に「NO」「×」「ダメ」「やめて」といったストレートな禁止用語を添えていました。しかし、本来、禁煙や嫌煙をアピールする趣旨のコンクールですから、これらの強い禁止語は言わずもがなです。もし文言を添えるなら、もっと別のやんわり感じるコピーがあってもよいのではないのでしょうか。

火の点いたタバコをへし折る手(厚生労働大臣賞)、紫煙を上げるタバコをへし折る力強いデザイン文字No(文部科学大臣賞)、5本の指の間で握り潰されたタバコ(大阪府知事賞)と、受賞作品は期せずしてタバコの惨めな末路を象徴したものになりました。(山田 彬)

## 3. 標語・川柳・ネーミングの部

昨今のちょっとした日本語ブームの影響というわけではないでしょうが、標語・川柳・ネーミングの部には、前回は上回る総数15,393点もの応募がありました。多くは5・7・5というリズム感のある作品で、ストレート(素直)な表現が目立ちました。

それらはどの作品も一定以上のレベルにあるとはいえるものの、群を抜いた強いインパクトを感じさせる作品が少なかったことは少し残念ではありました。

標語というものは、言葉で社会に対して何かを訴える働きをすべきものですから、私たちの心を射るものでなければなりません。直球で空振り三振を取るのも観客にインパクトを与えませんが、少しヒネリのある球で手も足も出ない見送りの三振を奪うのも魅力があります。ひと目で分かせねばならないマークとは異なり、標語はちょっと立ち止まって考えさせても良いのですから。

厚生労働大臣賞と大阪府知事賞の作品は、どちらも<笑顔>という言葉がキーワードになっていました。また文部科学大臣賞の作品も紙背には子どもの笑顔がのぞいています。笑いは心身の健康につながる道でもあり、次回のコンクールには笑いを言葉でひねり出した作品が多く登場することを期待したいところです。言葉の力というものを、健康な社会づくりに向けたこの啓発事業にもっと発揮してもよいのではないのでしょうか。(山田 彬)